
リインカーネーション ~ 転生 ~

新風ゆりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンカーネーション ～ 転生～

【Nコード】

N8075Z

【作者名】

新風ゆりあ

【あらすじ】

黒づくめの男によって、毒薬を飲まされた新一は、死んでしまいが、3年後、江戸川コナンとして生まれ変わる。

アクト1

工藤新一、死す！？（前書き）

初めまして、新風ゆりあです。よろしくお願いします

アクト1

工藤新一、死す!?

高校生探偵の工藤新一は、幼馴染で同級生の毛利蘭とトロピカルランドに遊びに行き、トロピカルランド内にある観覧車のたもとで、黒づくめの男の怪しげな取引現場を目撃してしまった。取引を見るのに夢中になっていた新一は、背後から近づいてきた黒づくめの男の仲間に気づかず、その男に毒薬を飲まされてしまった。そして、それから一時間後、トロピカルランドの警備員によって、新一は遺体となって発見された。そして、新一死亡という悲しい知らせは、警察と、蘭と、蘭の父親で探偵の毛利小五郎と、新一の家の隣に住む発明家の阿笠博士に伝えられた。

アクト1

工藤新一、死す！？（後書き）

新「おい、なんだよ、これ！？俺いきなり死んでんだけど！？」

ゆ「ストーリー展開上、そうなるの！」

新「こんなん、この話、続くのか？」

ゆ「大丈夫！」

新「ほんとかなぁ？」

残された人たちの思い（前書き）

2 話目です。

残された人たちの思い

「嘘でしょ？新一。死んだなんて嘘よね？」新一の遺体に縋り付き、蘭は大声で泣いた。その様子はまわりの人達の涙を誘った。「蘭君、君のつらい気持ちはよくわかるが、工藤君は死んだんだ。」目暮警部がつらそうな顔をした。「まさかこの探偵坊主がおっちゃんじまうとはなあ。一寸先は闇ってこのことか？」小五郎が顔をしかめた。

「まさか新一君がしんでしまうとはのう。わしゃ優作君たちに合わす顔ない。こんなことになるかわかつたら、3年前、優作君たちがアメリカで住むことにしたとき、新一君も一緒に行つたらよかつたんじゃ。じゃが新一君は日本に残りたいとごねたし、わしもわして新一君の面倒ぐらい見るって言ってしもうたし。あのときあんな事言わなんだらよかつたんじゃ！そうすれば新一君は死なずに済んだんじゃ！」博士が自分を責めた。

残された人たちの思い（後書き）

感想などお願いします。

アクト3

鑑識の結果（前書き）

3話目です。高木刑事が出ます。

「目暮警部！鑑識の結果が出ました！」高木刑事が報告書を持ってやってきた。「うむ。それで？」目暮が高木に尋ねた。「鑑識の結果、死亡推定時刻は今から一時間ほど前。死因は特定できませんでしたが、後頭部に何か固い棒のようなもので殴られたと思われる傷がありました。」高木が報告書を読み上げた。「自然死かね？」目暮が高木に尋ねた。「後頭部に殴られたと思われる傷があるので、自然死ではないと思いますが。」高木が答えた。「では工藤君は何者かに殴られ、気を失ったところで毒物でも飲まされたのか？」目暮が考えこんだ。「ですが警部、遺体から毒物らしき成分は検出されませんが、高木が答えた。「毒物らしき成分が検出されなかった？本当かね？それは。」目暮が高木に尋ねた。「はい。」高木がうなずいた。「そうか。ご苦労だった。ところで阿笠さん、優作君たちには知らせたんでしょうな？」目暮が高木をねぎらった後、博士に尋ねた。「もちろんじゃ。明日の朝、成田に着くそうじゃ。」博士が答えた。「そうですか。」目暮がトレードマークの帽子を目深にかぶりなおした。そのとき、蘭が自分のバッグからソーイングセットを取出し、そのソーイングセットからさらにはさみを取り出し、そのはさみの切り先を自分の左手首に当てた。

アクト3

鑑識の結果（後書き）

余談ですが、この3話目で、蘭が取り出したはさみは、「時計仕掛けの摩天楼」で爆弾の配線を切るのに使ったやつです。

アクト4

蘭の想い(前書き)

4話目です。

「らっ、蘭っ！？お前、何やってんだ？」小五郎があわてて、蘭の手から、はさみを取り上げた。と、同時に、博士が蘭を、背後から羽交い絞めにした。「やめるんじゃ、蘭君！そんなことをしても、新一君は喜ばん！むしろ悲しむだけじゃ！」「いやあ〜！放して、博士ー！新一のところに行かせてー！」蘭が泣き喚いた。「蘭、お前まさか、あの探偵坊主の事、好きだったのか？」小五郎が尋ねた。「うん。」蘭がうなずいた。「そうか。そうだったのか。で？お前は自分の気持ち、あの探偵坊主に打ち明けてたのか？」小五郎が渋い顔をした後、蘭に尋ねた。「打ち明けてなかった。だって、怖かった。好きって言って、もし新一から、幼馴染としてしか思ってた。好いて言われたらどうしようって思ったから。新一、割と女の子たちにもててたし、かつこよかったし、頭よかったし。サッカーバカで、ホームズおたくで、大馬鹿推理の助だったけど、私、そんな新一が好きだった。大好きだった！こんな、こんなことになるってわかってたら、もっと早くに打ち明けておけばよかった！」蘭が泣き崩れた。

アクト4

蘭の想い（後書き）

な、何とか更新できた。疲れた〜。

「蘭君、実はのお、新一君も君の事、好きじゃったんじゃ。」博士が蘭に話しかけた。「えっ!？」蘭が驚いた。「わしや、前に新一君に聞いたことあつたんじゃ。蘭君の事、どう思つておるんじやと。そしたら新一君、きつぱり答えたんじゃ。ただの幼馴染ではなく、一人の女性として見とると。」博士が切なさそうな顔をした。「博士、その話、本当なんですか!？」蘭が尋ねた。「本当じゃ。」博士が答えた。「そんな……。なんで、なんで言つてくれなかつたの?新一。」蘭が泣き崩れた。「わしも蘭君と同じこと聞いた。なんで言わんのじやと。そしたら新一君、蘭君と同じことを答えた。怖い、と。蘭君にただの幼馴染としてしか見てないといわれるかもしれない。そんなこと言われたら、きつと立ち直れない。そういつておつた。」博士がつらそうな顔をした。「新一がそんなことを? そんな……。新一!新一いー!!」蘭が泣き崩れた。「しんてから後悔したつて、もう遅い。二人ともちゃんと自分の正直な気持ちを言つておけばよかつたんだよ。」小五郎が顔をしかめた。

アクト5

博士の回想（後書き）

もうすぐお正月なのでしばらく更新できないかも・・・

「蘭君、状況から見て、工藤君は何者かに襲われた後、何らかの方法で殺害された可能性が高い。なくなってしまった工藤君のためにも、むしろ警察は、全力を挙げて捜査に当たり、君やわしらから、工藤君を奪ったにつくき犯人を、どんなことをしても逮捕しようと思っておる。だから君にも協力してほしいんじゃない！どんな些細なことでもいい！何か気づいたこととか、気になることがあつたら言つてほしいんじゃない！」目暮が蘭に頼みこんだ。「そう言えば、今日解決した事件の時、私たちと一緒にじつとコースターに乗ってた、黒づくめの男の人たちの事、新一、妙に気にしてたから、もしかしたらあの後、あの男の人たちに・・・。」蘭が泣きながら答えた。「高木君、すぐモンタージュ作るんだ！」目暮が指示を出した。

アクト7

工藤夫妻、帰国（前書き）

優作と有希子が出ます。

新一が死んだ翌日、工藤夫妻が成田に到着し、すぐさま警視庁に向かい、新一の遺体と対面した。「新ちゃん、なんで死んじゃったの！？新ちゃん！」新一の遺体を目にし、有希子が泣き崩れた。「それで目暮警部、新一を殺したかもしれない容疑者たちのモンタジューは？」優作が目暮に尋ねた。「出来とる。見るかね？」目暮が答えた後、尋ね返した。「もちろんです！」優作がきっぱり答えた。「これだ。」目暮が懐から二枚のモンタジューを取り出し、優作に差し出した。「この二人ですか。新一を殺したかもしれない容疑者たちは。」優作がモンタジューに映った、銀色の長い髪の目つきが鋭い男と、がっしりした体格のこわもて顔の男を睨みつけた。

「優作君、君にお願いがある。わしら警察は、新一君を殺した犯人を、どんなことをしても逮捕しようと思っておる。だから、君にも捜査に協力してほしいんじゃない！」目暮が優作に頼み込んだ。「むろん、そのつもりです。ただ明日からいいですか？今日はこれから新一の葬儀を行わないといけないので。」優作が答えた。「そうだったな。では明日、捜査本部を立ち上げるから、君も同席してくれ！」目暮が優作の肩をポンとたたいた。「わかりました。」優作が答えた。そしてその日、新一の葬儀が執り行われ、蘭は、涙ながらに新一に別れを告げた。そのとき、蘭は、自分の髪の毛を一房切り取り、新一に持たせた。そして蘭は、葬儀終了後、有希子から新一の遺髪をもらった。

新一の葬儀の翌日、警視庁で捜査本部が立ち上げられた。「それでは今から捜査を始める。」目暮が顔を引き締めた。そのとき、コンコン。ドアをノックする音がした。「ん？誰だ？」目暮は首をかじげながらドアを開けた。するとそこには小五郎がいた。「毛利君じゃないか！？どしたんだ？」目暮が驚いた後、尋ねた。「不肖、毛利小五郎、工藤新一殺害事件の捜査に加わりたく、やってまいりました！」小五郎が敬礼をしながら答えた。「毛利君、君はもう刑事でなく、一般人だ。その君を巻き込むわけにはいかん！」目暮が一括した。しかし、小五郎は引き下がらなかつた。「警部！私もあの探偵坊主を殺した犯人を捕まえたいと思ってるんです！協力させてください！」「しかしなあ。」目暮が渋った。そのとき、優作が口をはさんだ。「いいじゃないですか、警部。手伝ってもらったら毛利探偵なら、警察がつかめない情報、つかめるかもしれませんよ。」「優作君がそう言うなら・・・わかつた。毛利君、よろしく頼む。」目暮が小五郎の肩をポンとたたいた。「わっかりましたっ！」小五郎が答えた。

新一の死から一週間後、警察と、優作と、小五郎の努力が実ったのか、新一を殺したらしい容疑者が逮捕され、蘭は、確認のため、警視庁に呼ばれた。「どうだね？蘭君。あの男たちに間違いはないかね？」取り調べ室の映像を見せながら、目暮が尋ねた。そこには、あのモンタジューの男たちが映しだされていた。「はい！間違いありません！」蘭がきっぱり答えた。「警部、この男たちが新一を殺したんですか？」優作が尋ねた。「今、取り調べてるが、いともあっさり、工藤君に毒薬を飲ませたことを自供した。おそらく観念したんだろ。」目暮が答えた。「毒薬？変ですね。新一の遺体から毒物の成分は検出されなかつたんじゃ？」優作が首をかしげた。「それなんだが、奴らがいうには、工藤君に飲ませた毒薬は、遺体から成分が検出されない代物だそうだ。」目暮が顔をしかめた。

アクト10

容疑者、逮捕（後書き）

なぜたった一週間で犯人が逮捕されたかという点、裏設定ですが、新一の死を知ったベルモットがジンたちの情報を優作に売ったからです。

「あの、警部。確認終わったのなら、私、もう帰っていいですか？」
 蘭が目暮に尋ねた。「ん？あ、ああ、そだな。もう帰ってもいいよ。気を付けて帰るんだよ。」目暮が答えた後、注意した。「はい、わかりました。じゃ、失礼します。」蘭は目暮にあいさつし、警視庁を出た。「新一。新一を殺した容疑者、捕まったよ。警察の人たちや、新一のお父さんや、私のお父さんが捕まえてくれたんだよ。」空を見上げ、蘭はつぶやき、家に向かった。目の前の横断歩道を渡ると、家がある五丁目という交差点で。ドッシーン！！蘭は信号無視をして交差点に入ってきたトラックにはねられた。そして、その突然の悲劇的な知らせは、すぐさま、小五郎と英理に伝えられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8075z/>

リンカーネーション ~ 転生 ~

2012年1月4日07時47分発行